

弘文社のちりめん本『欧文日本昔噺』 シリーズ誕生の背景

——長谷川武次郎・デイビッド・タムソン・小林永濯の協働

尾崎 るみ

はじめに

2019年11月20日（水）から12月12日（木）の3週間、白百合女子大学図書館と白百合女子大学児童文化研究センターちりめん本研究プロジェクト共催で同大学図書館所蔵のちりめん本コレクションの一部を紹介する、『ちりめん本にみる東西文化の融合——明治の木版多色刷り絵本の世界』と題した展示が開催された。筆者は、白百合女子大学図書館が所蔵する貴重なちりめん本を活用し、プロジェクトのメンバーと共同で多角的に研究を進めるべく、間宮史子教授を主催者とするちりめん本研究プロジェクトを2019年春に立ち上げた。恩師である故桑原三郎教授が在任中に収集したちりめん本が図書館の貴重書室で眠っているのが気になっていたこともあるが、漢詩『孝女白菊詩』から講談社の絵本『孝女白菊』に至るまでの不思議な経緯をたどった作品を論じた際に美しいちりめん本仕立てとなったこの作品のドイツ語版を手にして以来、その美しさに魅了されたからである⁽¹⁾。

今回の展示は、11月23日（土）・24日（日）に白百合女子大学を会場として開催された日本児童文学学会の第58回研究大会を記念し、その日程に合わせて実施したもののだが、百冊以上のちりめん本コレクションの中から、何をどう選んで展示するかが最大のポイントとなった。プロジェクトメンバーで議論した結果、寄贈されている2枚の版木のうちの1枚——ひとつの面が『舌切雀』の一場面、もうひとつの面が『猿蟹合戦』の一場面が彫られているもの——を中心に据え、前期は『舌切雀』に、後期は『猿蟹合戦』に焦点を当てて展示品を選定するに至った⁽²⁾。

『舌切雀』も『猿蟹合戦』も、弘文社による『欧文日本昔噺』シリーズの初期に刊行された主要作品である。『舌切雀』については、滝沢馬琴が『燕石雑誌』（1811）巻之四『舌切雀』の末尾で「かくは今の子どもは、すこし作りかへたるところあり」と紹介したバージョンこそが原典と既に明らかにされていたが（田嶋、2009年、6-7

ページ)、このたび他の英文昔話についても『燕石雑誌』と照合した結果、『猿蟹合戦』、『勝々山』、『花咲翁』の三作品も『燕石雑誌』の記述を丁寧に逐語訳したものと分かった(梶村、2019年、3ページ)。

本稿では、そもそもなぜ長谷川武次郎(1853-1936、以下、武次郎)⁽³⁾が日本の昔話をさまざまな外国語に翻訳して出版しようと企てたのか、デイビッド・タムソン(David Thompson, 1835-1915、以下、タムソン)はなぜその企画に協力したのか、そしてまた小林永濯^{えいたく}(1843-1890、以下、永濯)を起用して挿絵を木版多色刷りした和装本に仕立てるというアイデアがどこから生まれたのか、『欧文日本昔噺』シリーズ誕生の背景を探ってみたい。

1. 長谷川武次郎の生い立ち

武次郎は、1853(嘉永6)年10月8日、父・西宮與惣兵衛、母・袖の次男として江戸に生まれた。家業については、質屋、魚屋を経て酒屋、食料品・酒類の輸入業など諸説ある⁽⁴⁾が、次男の彼には、当然のこととして自分なりの進路を切り開く必要があったはずである。明治維新後の文明開化の激流の中、武次郎は当時の進歩的な若者のひとりとして、新しい知識を得る機会を積極的に求めたのだろう。外国人から直接英語を学び、キリスト教や近代的な商業理論に接近したのである。

武次郎が十代後半で最初に接触した外国人は、米国長老派教会から派遣された宣教師、クリストファー・カロザース(Christopher Carrothers, 1840-没年不詳)とその妻ジュリア(Julia, 生没年不詳)であった。彼らは1869(明治2)年夏に来日し、築地に拠点を構えて英学塾を始めたが、武次郎は同塾の初期の生徒のひとりであったらしい。まだ切支丹禁制の高札が掲げられていた時代だが、間もなく武次郎はかなりの英語力を身につけ、キリスト教や聖書にも関心を抱き始めたという(Sharf, 1994, p.8)。

クリストファー・カロザースの私塾は築地大学校へと発展し、原胤明^{たねあき}(1853-1942)や田村直臣(1858-1934)らとともに1874(明治7)年10月に東京第一長老教会を設立したが、キリスト教宣教のあり方をめぐって他の宣教師たちとの対立が深まり、最終的には、1876(明治9)年春、クリストファー・カロザースは辞任に追い込まれるに至った(小檜山、1992年、190-206ページ)。カロザースの弟子とされる原と武次郎は同じ年齢だが、原がカロザースから受洗して東京第一長老教会の設立に深く関わったのに対し、武次郎はこの動きに連なっていない。

どのような経緯かは不明だが、武次郎はカロザースの元から離れ、同じ長老派であ

りながら超教派主義を唱えてカロザースと対立したタムソンに接近し、タムソンとの関係がその後の武次郎の事業に深く関わる結果となる。タムソンは、幕末の1863（文久3）年春に米国長老派教会派遣の3人目の宣教師として来日した人物である。横浜英学所での教員生活と、岩倉遣外使節団に半年先立って実行された、1871（明治4）年6月から約1年間の13大藩海外使節団の通訳兼ガイドとしての随行を経て、1872（明治5）年夏に東京伝道を開始し、1873（明治6）年2月初旬には横浜から築地へ拠点を移した。

同年1月1日から太陽暦が導入され、2月24日にはついに禁制の高札が撤去されてキリスト教が黙許されるに至るといふ大きな転換期にタムソンは武次郎の生活圏内に登場したことになる。

タムソンは、来日当初から熱心に日本語学習に取り組んだが、1865（慶応元）年からは小川^{よしやす}義綏（1831-1912）を日本語教師に迎えてさらに力をつけ、小川を助手としてヘブライ語の原本から旧約ヨブ記の和訳に取り組んでいた。小川は1869（明治2）年にタムソンから受洗し、築地へも同行した。1873（明治6）年9月の東京基督公会（のち^{しんざかえ}新栄教会）設立後は、タムソンは仮牧師、小川は長老を務めて同会を支えた⁽⁵⁾。『日本基督新栄教会六十年史』（1933）には、「明治初年の頃タムソン先生が和譯を試みられし詩篇とその筆跡」というキャプション付きの写真が掲載されているが、日本語学習を始めてまだ数年の外国人の手によるものとは思われない、力強い筆書きの文書である。

在籍期間は不明だが、武次郎はアメリカ人教師ウィリアム・C・ホイットニー（William Cogswell Whitney, 1825-1882、以下ホイットニー）を迎えて1875（明治8）年9月に尾張町（現中央区銀座）に開講された商法講習所（のち一橋大学）でも学んだ⁽⁶⁾。『福沢諭吉事典』の「商法講習所」についての記述によると、ここでは、ホイットニーが英語で簿記や商業算術などを教えたという。また、1878（明治11）年9月28日に、武次郎は母方の親戚筋の長谷川清七の養子となって長谷川姓となった（鈴木、1994年、143ページ）。Sharfの調査によると、1877（明治10）年に武次郎は最初の結婚をし、1880（明治13）年には夫婦そろってタムソンから洗礼を受けている。Sharfは、最初の妻の名前は不明で、この結婚は長くは続かなかつたようだと述べている（Sharf, 2002, pp.8-10）。

2. 兄・西宮松之助の翻刻出版事業

弘文社を検索ワードとして国会図書館の蔵書を調べてみると、京橋区南佐柄木町二

番地の弘文社と東京日本橋通三丁目の丸屋善七が「発兌書肆」、森島修太郎（東京府平民 深川区安宅町四番地）が「著者并出版人」となっている『簿記学例題』という書籍が1879（明治12）年10月に刊行されている。

『福沢諭吉事典』の「商法講習所」によると、森島修太郎は慶應義塾を経てホイットニーの商法講習所で学び、1877（明治10）年に初めての卒業生のひとり（初代卒業生は2名のみ）となった人物である。同書は商法講習所で使用されていたと思われるアメリカの簿記教科書を翻訳し、それに森島が手を加えたものである⁽⁷⁾。翌月には、同じく森島が「編纂兼出版人」、「発兌所」が弘文社の『利息一覧表』という小冊子が出ている。森島は、1878（明治11）年に三菱商業学校が設立されると同校の教員となったという。

1880（明治13）年3月に弘文社から刊行された吉田信孝著『学校用本 西洋画手本 初編』は、直線の引き方から果物の描き方までを難易度別に図解で示した小中学校程度向けの美術教育用テキストで木版印刷による20丁のものだが、この奥付には武次郎との関連を示唆する氏名を見出すことが出来る。鈴木あゆみが指摘しているとおり、同書の「売捌所」として5名の氏名と3つの社名が並んでいるのだが、そのひとつが「東京銀座四丁目 西宮松之助」となっており、これは武次郎の兄の名前なのである（鈴木、1994年、144ページ）。弘文社から同年に刊行された小宮山弘道訳『近代二大發明伝話機蘇言機』の奥付にも、同じく「売捌所」のひとつとして西宮松之助（生没年不詳、以下、松之助）の名が記されている。

これまで、武次郎と兄・松之助の関係については弘文社の出版物を松之助が販売していたという上記の指摘がなされたのみであった。輸入品販売のかたわらで書籍も扱っていたような印象を筆者も抱いていたが、松之助自身が発行者としてさまざまな書籍を出版しているほか、アメリカの英語教科書の翻刻出版事業に大きく関わっていたことが判明した。松之助がどのような仕事をしていたか、現在分かる範囲において時系列で示してみたいと思う。

筆者が確認した松之助による最も早い時期の刊行物は、ホイットニーが商法講習所で教科書として使用していた、*Manual of Theoretical Training in the Science of Accounts* という英語の簿記の教科書である。これは、2003（平成15）年度一橋大学附属図書館企画展「複式簿記がやってきた！：明治初期簿記導入史と商法講習所」の公開展示室で画像を確認できるが、著者名が記されていないため、長らくホイットニーが執筆したものと考えられていたという。後にこれは、1868年にアメリカでパッカード（Silas Sadler Packard, 1826-1898）が出版した同名の書籍を翻刻したものと判明したのだが、上記書籍の表紙には、「Tokyo: M.Yamatoya, the 10th Year of Meidzi [1877]」という記述があるほか、奥付には、「出版発行 西宮松之助」という日本語

の表記がある。パッカードの書籍をアメリカから輸入するのではなく、日本国内で翻刻出版して商法講習所の生徒に使用させたわけだが、その仕事を行ったのが武次郎の兄だったのだ。

この仕事が契機となったのかどうか分からないが、『丸善百年史 上巻』（1980）によると、松之助は1880（明治13）年に丸善が中心となって設立した「洋書翻刻組合六合館」の一員となっている。これに加盟したのは、「松井忠兵衛、清水卯三郎、西宮松之助、伊藤徳太郎、塩島一介」で「組合の主任のような地位を占めた」のは、丸善の創業者・早矢仕有^{またいとこ}的の「再従弟」にあたる早矢仕民治だった（飯泉、1980年、209-210ページ）。

筆者が架蔵している『ウィルソン第一リーダー』⁽⁸⁾の奥付には、「明治十三年十月七日翻刻御届」とあり、その横に「翻刻人」として、上記の六名がそれぞれの住所と「土屋 松井忠兵衛、大和屋 西宮松之助、慶雲堂 伊藤徳太郎、丸屋 丸屋善七、瑞穂屋 清水卯三郎、島屋 塩島一介」の順に記載されている。ちなみにこの時点での松之助の住所は、「京橋区鎗屋町七番地」となっており、銀座から移転している。松之助の名は同第二リーダー（1881）にも、同第三リーダー（1883）にも、「出版人」のひとりとして記載されている

あまり詳しく述べている余裕はないが、松之助は草間時福訳『克蘭度氏世界漫遊記』（1880）、相馬永胤著『英米売買法』（1881）などの出版人となっているほか、多くの書籍の「売捌所」として名前を連ねている。しかしながら、翻訳書などの出版事業よりも、英語リーダーなどの翻刻事業の方に比重が傾いたのではないかと考えられる。川戸道昭によると、「洋書翻刻組合六合館」は日本で最初に英語リーダーの翻刻出版を手掛けたグループで、その英語表記である‘Tokio: Bookselling Company’あるいは‘Rikugokuwan’の名のもとに、1884（明治17）年以前には、「本邦で刊行された英文教科書の大部分が翻刻出版され」、「一種の独占出版・販売のようなものだった」（川戸、1994年、96-97ページ）からである。

『ウィルソン・リーダー』は、「明治初期において最も広く用いられた英語読本」（高梨、1994年、22ページ）であり、1873（明治6）年に文部省が制作した『小学読本』の巻一と巻二は、『ウィルソン・リーダー』の本文を翻訳したものであったことがよく知られている。明治中期になると『ナショナル・リーダー』などへと人気が移っていくが、外国語学習熱が高まっていた明治十年代に全国規模の大きな需要をまかなう翻刻事業を支えたひとりが武次郎の兄であったことになる。

松之助の出版物でもうひとつ気になるものは、1883（明治16）年に西宮松之助を「編纂兼出^ア板人」として刊行された『学事表取扱心得』である。これは、34ページの小冊子だが、教育現場で作成が求められる甲^ア号・乙^ア号・丙^ア号の3種の「学事表簿」に

記載すべき項目などについて解説したものである。当時は各学校がこのような指示に基づいてそれぞれ書類を作成して提出する必要があったようだが、解説内容はともかく、筆者の興味を引いたのは、奥付に記された次の文言である。

東京府丙第十六號布達

学事表簿

今般弊店ニ於テ発売仕候間陸続御注文アランヲ乞フ

甲 美濃紙摺 十面 定価 金四銭

乙 同 十面 定価 金四銭

丙 同 十二面 定価 金四銭八厘

右ノ内一種ニテモ百枚以上御注文ニ相成候節ハ定価ヨリ二割引

千枚以上二割五分引ヲ以テ調達仕候

ここから、松之助が美濃紙に印刷した学事表用紙を学校向けに大量販売していたことが分かる。このような松之助の翻刻出版事業ならびにそれに必要な用紙の確保といった物流事業の経験は、その後の武次郎の出版活動に役立てられたに違いない。兄の事業を武次郎が手伝っていた可能性も考えられるが、それを証明する資料は現れていない。

弘文社は、1881（明治14）年に挿絵付きでさまざまな動物について平易に解説した『訓蒙動物学』（上）（下）を刊行しているが、この奥付の「発兌所」の社名右上に「教育書房」と小さく付記している。また、1885（明治18）年11月には葛飾北斎が描いた風景画を永濯が「補正」し、木版で墨刷りした『中古名家画帖 北斎遺画之部』が弘文社から刊行されている。しかし、同書の「出版人」は「東京府平民 中川榮吉 東京府下京橋区南佐柄木町二番地」となっており、この時点では、中川が社主であったものと考えられる。

3. 『欧文日本昔噺』シリーズの誕生

教育系の出版へと路線を定めた弘文社が日本の昔話の外国語訳を本文とし、それに木版印刷による挿絵を添えて外国語学習の副読本として売り出そうと考えた背景には、松之助らが関わった海外の英語教科書（英語リーダー）の翻刻事業の成功があったと考えられる。

見知らぬ海外の文物や物語をとおして外国語を学ぶよりも、誰もがよく知っている日本の昔話が外国語で綴られていたら学習効率が高いのではないかと考えた武次郎の目の付け所は、斬新であった。1871（明治4）年という非常に早い時期に、A. B. ミッ

トフォード (A. B. Mitford, 1837-1916) が2冊本の *Tales of Old Japan* で『舌切雀』など計9編の昔話を英語で紹介しているが、これは西洋の読者に日本の文化や文学を知らしめるために編まれ、ロンドンで出版されたものである。日本国内で日本人を読者対象とした易しい英語の読み物を刊行するという発想、それに多色刷りの美しい挿絵をほぼすべてのページに載せるといったアイディアはそれまで誰も思い付かず、ましてや誰も試みてはいなかった。

カロザースの英学塾で武次郎がどのように学んだかは不明だが、恐らくアメリカの英語教科書で苦労しながら英語力を身につけたはずである。自らの経験があったからこそ、魅力的な美しい挿絵入りの『欧文日本昔噺』シリーズがあれば、外国語学習に有効なはずだと考えたに違いない。

国文学研究資料館の明治期出版広告データベースによると、1885 (明治18) 年10月の『出版書目月報』第94号には、弘文社から定価12銭で発売された「ダビッド、タムソン氏訳述」の『舌切雀』が載っている。これが、最初に刊行された『欧文日本昔噺』シリーズの一冊と考えられるが、当初から具体的なシリーズ化の意図があったかどうかは不明である。同年10月21日の『絵入自由新聞』に掲載された広告には、「彩色絵入」の『日本昔噺』の「英吉利文」、「独乙文」、「仏蘭西文」がそれぞれ12銭、「学校教科用彩色無し特別廉価」版がそれぞれ4銭で「舌切雀猿蟹合戦花咲翁桃太郎此外続々出版」とある。さらに、「右は童蒙に輒く洋語を習熟せしむる為め各其国の大家に乞ひ簡易なる文辞を以て編述し日本風の彩色絵を加へたる美本なれば学校の賞与品又は御進物等にも亦適當の小冊なり」と記されている。これらの記述から分かることは、当初から英訳だけでなく独訳と仏訳も用意されたこと、彩色版と墨刷り版の二種類が刊行されており、彩色版の価格は墨刷り版の三倍であったことである。

初期に刊行された『欧文日本昔噺』では、SHITAKIRI SUZUMEのように、タイトルがそのままローマ字で表記され、シリーズ名や番号も記されておらず、出版社名が弘文社と記されているだけである。長谷川武次郎の名前がはっきりと「出版人」として明記されるようになるのは、管見では、1886 (明治19) 年6月に刊行された『癩取』からのようである。ただし、武次郎の名前が当初は出ていなくとも、『欧文日本昔噺』シリーズの企画を立て、実行したのは彼であることに間違いないと考えられる。何よりも、タムソンに翻訳を依頼することが出来たのは、信仰をとおして深い信頼関係を築いていた武次郎であったからこそと考えられるからである。

留学経験のある日本人などに翻訳を依頼するのではなく、学識の高い外国人に母国語による翻訳を依頼したのも、『欧文日本昔噺』シリーズの成功の一因であった。平易だが格調高い本文であったからこそ、国内での販売にとどまらず、海外での幅広い受容につながったと考えられる。

4. キリスト教宣教活動と出版

キリスト教宣教活動と印刷技術は15世紀のグーテンベルクによる活版印刷技術の発明以来、非常に深く関わってきた。16世紀末にイエズス会宣教師たちは天正遣欧使節がヨーロッパから持ち帰った印刷機で日本語をローマ字表記した宗教書や教科書を九州地域で刊行したが、19世紀におけるプロテスタント各宗派の宣教活動においても、日本語で聖書や宗教書を作成・印刷することが宣教師たちの大きな課題となった。彼らは熱心に言語を学び、いち早く聖書の翻訳に取り組んだが、特に顕著な働きをしたのは、ジェイムズ・ヘボン（James C. Hepburn, 1815-1911、以下、ヘボン）である。ヘボンが来日したのは、幕末の1859（安政6）年秋だが、彼はその前に1840年から約5年間、シンガポールと中国に宣教医として米国長老派教会から派遣されていた。その頃からマレー語や中国語の研究をし、日本に半世紀ほど先行して行われた東アジアにおける文書伝道活動のノウハウを学んでいたのである⁽⁹⁾。

ヘボンは来日直後から精力的に日本語を学習し、辞書の編纂と聖書の和訳を目指した。中国滞在中に漢字を学んだ彼は当初から漢籍を読むことが出来たが、さまざまな和書を集め、幅広い日本語表現に触れる努力をしたようである。『古事記』、『源平盛衰記』、『平家物語』、『東海道中膝栗毛』などもその中に含まれていたという。また、1862（文久2）年に来日したイギリス人のアーネスト・サトウ（Ernest Satow, 1843-1929）がサミュエル・ブラウン（Samuel R. Brown, 1810-1880）から日本語を学んだ際、『鳩翁道話』を読み聞かせられたという証言もある（高谷、1954年、199ページ）。ブラウンは、ヘボンに半月遅れて来日したアメリカ・オランダ改革派教会宣教師だが、シンガポールで既にヘボンと交流しており、来日後は同じ成仏寺境内に居住した。談話体による『鳩翁道話』が日本語学習初心者に適しているという認識は、ヘボンにも共有されていたと思われる。タムソンが来日したのは、1863（文久3）年だが、到着当初はブラウン一家らと共に成仏寺に居住した。タムソンが『鳩翁道話』で日本語の初歩を学んだ可能性もある。

高札撤去以前の日本では、文書伝道活動も困難を極めた。ヘボンは、中国語のトラクト（宗教的小冊子）・『真理易知』を日本語教師に和訳させ、それを秘密裏に版木に彫らせることに成功したが、国内では幕府を恐れて誰もその印刷を引き受けなかったため、1866（慶応2）年、上海にある米国長老派の印刷所（ミッション・プレス）・美華書館で『和英語林集成』を印刷しただけではなく、『真理易知』の日本語版千部も上海で印刷して持ち帰ったという。（高谷、1954年、229ページ）。

高札が撤去された後、いち早くキリスト教関係の書籍の販売や出版を行う「耶蘇教

書肆十字屋」を銀座3丁目に創設したのは、原胤昭である。彼は1874（明治7）年に旧大垣藩主一族の戸田鉄堂と共に十字屋を立ち上げ、翌年にはカロザースの著書を翻訳した『略解新約聖書』を刊行している。また、十字屋は日曜学校で子どもたちに配布するカード「教の札（サンデイス쿨カード）」も1877（明治10）年から手掛けているのだが、ローゼイ・ミラー（Rothesay Miller, 1843-1915）から「日本版画の花鳥風月や山水景色等の図柄」をリクエストされ、浮世絵師の小林清親（1847-1915）に依頼して美しいカードを作成したところ、日曜学校の子どもたちに好評だっただけでなく、店頭でもよく売れたという。その後、このカードはホテルのテーブルカードに転用され、ヨーロッパにも輸出されることになった。その延長線上の展開として、原は1882（明治15）年から宗教書だけではなく、輸出用の錦絵の発行を手掛け始めた。翌年には、「地本錦絵問屋はら」を開設し、絵草紙屋仲間から推挙されて同業者会の幹事になっただけでなく、東京府商工会議員にも就任している（片岡、2011年、68ページ、78-79ページ）。

しかし、自由民権運動に共鳴し、福島事件の被告の肖像を描いた風刺錦絵を「天福六家撰」として発行したところ、原は逮捕されて石川島監獄に収監されてしまう。同監獄で非衛生的で劣悪な環境を体験し、自身もチフスに感染して危うく命を落としかけた。運よく回復して釈放された原は、その後の人生を監獄改良や出獄人保護事業に捧げることになる⁽¹⁰⁾。

十字屋による出版物でもうひとつ注目したいものは、1878（明治11）年に刊行された「タムソン閲」とされる『教の読本第一』、『教の読本第二』、『教の読本第三』の三冊本である。これらは国会図書館にも所蔵されていないのでどのような内容か不明だが、書名から日曜学校用のテキストではないかと推測される。タムソンも十字屋の出版物に関わっていたとなると、彼も十字屋製の木版多色刷りの美しい日曜学校カードを知っていたはずである。

5. 小林永濯のさまざまな仕事

ここで、絵師の小林永濯について述べておきたい。小林清親と姓が同じだが、血縁関係や師弟関係にはない。1843（天保14）年、彼は江戸で魚問屋を営む家に生まれるが、家業を好まず12歳で狩野派の宗家中橋狩野家の第15代当主狩野永憲^{えいとく}に入門し、徳宣の名と永濯の号を与えられている。姫路藩お抱え絵師・狩野永秀の養子となるが、1864（元治元）年に御用絵師の仕事を辞め、その後は絵画、錦絵、挿絵、などさまざまな分野で活躍を始める（岡本、2008年、203ページ）。武次郎の『欧文日本昔噺』シリーズなどには、「鮮齋永濯」の画号を用いた。

明治初年には、『郵便報知新聞』や『横浜毎日新聞』などに錦絵を描き、1877（明治10）年の西南戦争の際には、激戦シーンの錦絵を何枚も描いている。さまざまな書籍の挿絵も手がけており、1884（明治17）年1月に延寿堂から刊行された『絵入 初編 日本外史（上）（下）』は、頼山陽の『日本外史』を松村春輔が平易な書き下し文に編集し、永濯による挿絵を添えたものである。見開きで描かれた歴史的名場面は、墨刷りながら勢いが感じられる。1885（明治18）年10月に岡本経朝を編集人、森戸錫太郎を出版人とし、発売人・萬字屋錫太郎が刊行した53丁から成る『古今百風吾妻余波』という書物は、当時の女性の髪形や衣服から子どもたちの遊びの種類に至るまでさまざまな風物を永濯の絵で示した図鑑のような本だが、タイトルや目次、そして挿絵の題目が日本語と英語の二か国語表記になっている。英語のタイトルは *Ancient and Modern Various Usages of Tokio Japan* で、説明文は英訳されていないが、永濯が細部まで丁寧に描き込んだ挿絵を眺めるだけでも楽しめたはずの一冊である。全ての挿絵を永濯が描いていることから、この頃、永濯が精力的に多くの仕事をこなしていたことが分かる。

また、永濯は、「楽善堂」の薬の引札（商業用ポスター）も描いている。この引札がいつ頃発行されたのか不明だが、「楽善堂」は岸田吟香が1877（明治10）年に立ち上げた薬屋なので、それ以降のことになる。岸田吟香は、ヘボンが『和英語林集成』を刊行する際に助手として上海まで同行した人物で、ヘボンから処方伝授された目薬を「精錡水」と名付けて販売していた。「楽善堂」の引札は、早稲田大学図書館の古典籍総合データベースで画像を確認できるが、着物姿の女性を中央に添え、背後の屏風に「精錡水」他の薬品名を大きく配置したものや、戸外で母親と息子が並んで立ち、壁に貼られた薬の効用書を眺めているものなど、穏やかな雰囲気が漂う、美しい木版多色刷りポスターである。

永濯は1884（明治17）年2月に日本画の革新を標榜して設立された鑑画会に加わり、翌年の鑑画会第一回大会に「僧祐天夢に不動を見る図」を出品して一等賞を受賞しているが、武次郎をはじめとして、一般の人々には、「楽善堂」の引札の描き手として、認知されていたかもしれない。

前記のとおり、葛飾北斎の風景画を永濯が「補正」し、それを木版墨刷りしたものが、『中古名家画帖 北斎遺画之部』として1885（明治18）年11月に弘文社から刊行されているが、この仕事と『欧文日本昔噺』シリーズの仕事と、どちらが先にスタートしたものであるかは不明である。

6. 武次郎・タムソン・永濯の協働

すでに述べたとおり、『欧文日本昔噺』シリーズで最初に刊行されたのは、1885（明治18）年10月に出た英語版の『舌切雀』である。準備期間としてどれだけの時間が必要であったのか不明だが、『燕石雑誌』の記述に基づいたタムソンの丁寧な英訳作業にもそれなりの時間がかかったであろう。絵師の永濯に対しても、『燕石雑誌』の該当箇所を示して、挿絵の準備を促したことだろう。下絵が描きあがると、彫師が版木を彫り、それを色別に刷り上げてようやく多色刷りの挿絵が完成する。その上で、英文の本文が活版で印刷され、最後に製本作業に回されることになる。最低でも数か月はかかる工程であったに違いない。

1914（大正3）年の『美術新報』に掲載された武次郎の回想記「木版画の輸出」には、「木版画の輸出を私が始めたのは、明治十六年の頃」で「日本の昔噺を木版刷の絵本にして英文の説明を加へて出したのが始め」という記述がある。約三十年前のことを語っているので時期の正確性については疑問が残るが、『欧文日本昔噺』シリーズが世に出るまでに、1883（明治16）年頃からの準備期間が必要だったとしても不思議ではない。

武次郎は凝り性でちりめん本のレイアウトなども自分で手掛けていたようだが（鈴木、1994年、145ページ）、『欧文日本昔噺』シリーズを企画するにあたって、それぞれの言語を母国語とする、信頼に足る人物に翻訳を依頼した一方、日本の昔話に相応しい挿絵を描くことの出来る人物として永濯に白羽の矢を立てた。武次郎のこの決断は、最高レベルの品質を目指したところからなされたと思われるが、結果として、優れた翻訳者による的確な文章と確かな描写力を備えた絵師による優美な挿絵が組み合わせられることになり、魅力ある『欧文日本昔噺』シリーズを誕生させることに繋がったといえよう。フランス語やドイツ語などのその他の言語への翻訳は、英訳をもとに行われたものと考えられる。どの言語の場合も挿絵は共通なので、本文の部分の活版印刷のみ別に行えばよいわけである。その意味でも、『欧文日本昔噺』シリーズの基本路線を確立したといえる、創成期におけるタムソンと永濯の協働は大変重要であったと考えられる。

1885（明治18）年10月27日の『絵入自由新聞』「雑報」欄の記事は、見本として届いた弘文社の「日本昔噺と題せる洋文の冊子数種」は「近来未曾有の美本」であると高く評価している。また、『横浜メール』、『ヘラルド』といった英字新聞が「此書広く海外に行なはるれば我国美術の一斑を示すに足り大に益する所あるべし」と海外での好意的な受容に太鼓判を押していると述べ、「殊に此書は専ばら外国輸出を主とし

既に英仏独の三国へは数千部を積送り彼地にて尤とも好評を得陸続同社へ注文ある由にて昨今は編輯印刷等手廻り兼る程の多忙なりと云ふ」と締めくくっている。

英仏独に既に数千部を送付したという記述は事実に基づくものなのかどうか、今のところ判断する材料を持たないが、国内での学習用には廉価版、贈答用あるいは海外輸出用には「彩色絵入」版と目的に応じてその体裁と価格を変え、より多くのニーズに応えようとした戦略はなかなか優れたものであったと思われる。

『出版書日月報』の報告や『絵入自由新聞』に掲載された弘文社の広告をとおして、弘文社の『欧文日本昔噺』シリーズは、1885（明治18）年10月の『舌切雀』発売開始以来、着々とラインナップを増やしたことが確認できる。『猿蟹合戦』、『花咲爺』、『桃太郎』、『鼠嫁入』、『勝々山』、『瘤取』、『浦島』の順で刊行が続き、1886（明治19）年5月には、「挿絵改正鮮齋永濯画」の『桃太郎』が再版されている。同年6月5日の『絵入自由新聞』掲載の広告からは、新たに『勝々山』、『瘤取』、『浦島』の3冊ならびに再版の『桃太郎』がどれも永濯の挿絵で刊行されたこと、『舌切雀』の英語版、独語版、仏語版、オランダ語版は刊行済みで、「ロシア語版」は「近刻」であることが分かる。

『欧文日本昔噺』シリーズの刊行を始めてからまだ1年が経過していないにもかかわらず順調にラインナップを増やし、翻訳する言語も多様化している。さらに、この広告では、弘文社は従来ドイツ語書籍の販売をしてきたが、これに加えて新たにパリの「クワンテン商会」からのフランス語の「工芸美術に関する書籍」の委託販売を始めたことが分かる⁽¹¹⁾。

1886（明治19）年10月の『出版書日月報』には、弘文社の「自第一号桃太郎至第六号鼠嫁入」の「小本一冊」が定価60銭という記述がある。6冊をまとめた合本を作成し、60銭で売り出したわけだが、ここで初めて『桃太郎』を「第一号」とし、順次番号をつけて秩序立ったシリーズ化を試みたのだと思われる。『桃太郎』はすでに再版されており、最も人気の高い商品であることが確認されているので、これを「第一号」としたのであろう。

7. 「縮緬紙」版の登場

番号をつけてのシリーズ化のあと、武次郎は『欧文日本昔噺』シリーズの更なる発展のためにもうひとつの工夫を試みた。それは、挿絵と本文を刷った紙をさらに加工して「縮緬紙」とし、製本するという「縮緬紙」版の導入である。「縮緬紙」版が登場したのはいつか特定できないが、1887（明治20）年に入って間もなくのことだった

のではないかと考えられる。なぜならば、1887（明治20）年11月に弘文社から「訂正再版」された『簿記学例題』巻末の「弘文社出版書目」に「縮緬紙」版が紹介されているからだ⁽¹²⁾。

前述の武次郎の回想記「木版画の輸出」には、「縮緬紙」版の導入について、海外輸出の伸び悩みを打開するために「不図縮紙でしたらばと思ひ付いてやつて見ました処、これが案外評判が宜しくて盛んに歓迎されました」とある。ちりめん状のしわ加工を施した「縮緬紙」自体は、18世紀末頃から浮世絵などに用いられることがあったようだが、全ページ「縮緬紙」を使用して製本した例はそれほど多くなかったらしい（大塚、2013年、14ページ）。

「縮緬紙」の制作には、挿絵と本文の印刷を済ませた柔らかな和紙に「プレス」または「揉み台」などと呼ばれる木製の装置を使ってさまざまな角度から10回ほど圧力をかけるという手間のかかる工程が必要となる（榎本、2014年、291-292ページ）が、しわ加工に伴う縮小化により、独特の風合いと美しさが生まれるのである。

それにしても、活版印刷技術が導入され、大量印刷がさかんに行われるようになり始めていたこの時期になぜ手仕事による木版多色刷りや「縮緬紙」の採用に武次郎はこだわったのだろうか。西洋では、19世紀後半から日本の浮世絵や手工芸に関心が高まり、ジャポニズムの波が起こるが、十字屋を経営した原胤昭が木版多色刷りの日曜学校用カードの制作をきっかけに錦絵の輸出を始めた展開を間近で見ていた武次郎には、木版多色刷りの和装本が外国人の眼にどのように映るか想像がついていたのかもしれない。彼の予測は当初の平紙本版ではやや裏切られたが、縮緬紙版では期待以上のものとなったということだろう。

8. 1887（明治20）年末における弘文社の出版状況

1887（明治20）年に再版された『簿記学例題』は国会図書館のデジタルコレクションで閲覧可能だが、巻末の「弘文社出版書目」は実に多くの情報を提供してくれる。まずは、この時期までの『欧文日本昔噺』シリーズの既刊書が「英文ノ部」「仏蘭西文ノ部」「独逸文ノ部」「荷蘭文（筆者注：オランダ語）ノ部」の四つの言語において日本語タイトルと翻訳者名、そして価格と共に列挙されている。また、これらのほとんどは「彩色摺」と示されているが、英語版のみ「縮緬紙」版が12冊セットで1円50銭という特別形態で販売されていたことが分かる。特殊加工が必要な「縮緬紙」版がそれほど高額ではないことに驚かされるが、低賃金による職人労働あってこそその価格であろう。また、この時点では、英語版の一部のみが「縮緬紙」仕様で刊行されてい

て、その他はすべて平紙仕様であったことが分かる。

さて、若干煩雑ではあるが、貴重な資料だと思われるので、「弘文社出版書目」の一部を以下に示しておきたい。

弘文社出版書目

欧文日本昔噺

Japanese Fairy Tale Series.

英文ノ部 (彩色摺)

		實價	
桃太郎	ドクトル タムソン先生譯述		金拾銭
同 (第二版)	同		金拾貳銭
舌切雀	同		金拾銭
猿蟹合戦	同		金拾銭
花咲翁	同		金拾銭
勝々山	同		金拾貳銭五厘
鼠嫁入	同		金拾貳銭五厘
瘤取	ドクトル ヘボン先生譯述		金拾銭
浦島	チャンバレーン先生譯述		金拾貳銭五厘
八頭ノ大蛇	同		金拾貳銭五厘
松山鏡	ジェイムス夫人譯述		金拾銭
因幡ノ白兔	同		金拾銭
野干ノ手柄	同		金拾貳銭五厘
海月物語	チャンバレーン先生譯述		金拾銭
彦火々出見命	ジェイムス夫人譯述		金拾貳銭五厘
俵藤太物語	チャンバレーン先生譯述		金拾貳銭
鉢かつき物語	ジェイムス夫人譯述		金拾貳銭五厘

以下続出

英文日本昔噺	第一ヨリ六マデ合本一冊	同	金五拾五銭
同	第七ヨリ十二マデ合本一冊	同	金五拾五銭
同	第一ヨリ十六マデ十六冊箱入	同	金壹円八拾銭
同縮緬紙	第一ヨリ十二マデ十二冊箱入	同	金壹円五拾銭

仏蘭西文ノ部 (彩色摺)

桃太郎	エブラール先生譯述	同	金拾貳銭
舌切雀	ドートルメール先生譯述	同	金拾銭
猿蟹合戦	同	同	金拾銭
花咲翁	同	同	金拾銭

独逸文ノ部 (彩色摺)

舌切雀	ドクトル グロート先生譯述	同	金拾銭
猿蟹合戦	同	同	金拾銭

荷蘭文ノ部 (彩色摺)

舌切雀	ファンスケルムベージ先生譯述	同	金拾貳銭
-----	----------------	---	------

以上の記述から、『舌切雀』刊行以来わずか2年間で『欧文日本昔噺』シリーズのラインナップが英語版では16作品に及んでいることが確認できる。また、再版された

『桃太郎』が初版と並んでより高い価格で販売されていたことも分かる。

また、翻訳者も英語では、タムソンの他に、ヘボン、チェンバレン (Basil Hall Chamberlain, 1850-1935)、ジェイムス夫人 (Kate James, 生没年不詳) の3名が、フランス語ではエブラール (Felix Evard, 1844-1919) とドートルメール (Joseph Dautremere, 1860-1946)、ドイツ語ではグロート (Adolph Groth, 生没年不詳)、オランダ語ではファンスケルムペーギ (P.G.van Schermbeck, 生没年不詳) が加わり、協力者の輪が広がっていることが分かる。

さらに「弘文社出版書目」の紹介を続けると次のようになる。

文部省御検定済			
学校用日本昔噺 英文桃太郎	實價	彩色摺	金八錢五厘
ドクトル タムソン原譯	ジェイムス夫人編纂	墨摺	金五錢
学校用ノ部			
舌切雀	墨摺	實價	金四錢
猿蟹合戦	同	同	金四錢
花咲爺	同	同	金四錢
勝々山	同	同	金五錢
鼠嫁入	同	同	金五錢
学校用日本昔噺獨學	桃太郎ノ部全一冊 鈴木甲次郎先生譯	實價	金六錢
英文 蝦夷昔噺	王堂チャンバレーン先生編纂		
AINO FAIRY TALES First Told in English by B.H.Chamberlain.			
第一號 仙境ニ到リシ獵士ノ話	全一冊	實價	金拾六錢
第二號 鳥ノ宴會	全一冊	實價	金拾貳錢 以下續出
英文 竹取物語	英国公使館譯官 アストン先生譯	全一冊	
和文 西洋昔噺	八ツ山羊	全一冊	
	彩色摺	實價	金拾錢
帝国大学教師	語学博士チャンバレーン先生著		
和語 英文典	全壹冊		明治廿一年三月出版

上記からは、「学校用」としてタムソンによる英文をジェイムス夫人が学習用にさらに易しく書き改めたものが作成されていたことが分かる。『桃太郎』だけは別格で彩色版と墨刷り版の2種が用意されていたこと、『学校用日本昔噺獨學』という書名で英文の『桃太郎』の日本語版が弘文社から刊行されていたことが確認できる。「独学」あるいは「独案内」という名称がついた教科書ガイド的な直訳本が、明治中期から多くの欧米の英語教科書のために出版されていた。武次郎は、自社が刊行した英文テキストの参考書を自ら手掛けるという双方向の仕事をしたことになる。

また、チェンバレンがアイヌの昔話を英文でまとめた二つの物語がこの時点ですでに刊行されている。ここでは特にその体裁について記されていないが、永濯の挿絵が木版多色刷りされた平紙本である。

グリム童話の『オオカミと7ひきの子ヤギ (KHM5)』を翻訳した「和文 西洋昔噺」と銘打った『八ツ山羊』も既に刊行されていることが分かる。結局、西洋の昔話を翻訳した作品は『八ツ山羊』のみで終わってしまったが、この時期、武次郎は新たに「縮緬紙」版を手掛けてみたり、「和文 西洋昔噺」の刊行を始めたりとさまざまな試行錯誤をしていたと考えられる。

「縮緬紙」版導入などの新たなチャレンジの背景には、武次郎の私生活における変化を指摘することができる。武次郎の最初の結婚は長く続かなかったと先に述べたが、武次郎は木版印刷業者・小宮惣次郎のひとり娘で1867（慶応3）年6月18日生まれの屋寿（やす）と知り合い、長男・敬事が1887（明治20）年2月に誕生している。詳しい事情は不明だが、その後二人の間には次々と子どもが生まれたにもかかわらず、屋寿が正式に入籍したのは、1903（明治36）年になってのことである⁽¹³⁾。

さて、「弘文社出版書目」には『英文 竹取物語』の書名が挙がっているが、翻訳者は「英国公使館譯官アストン先生」となっていることに注目したい。価格の記載はないため、出版予告としてここに書名と翻訳者名が示されたものと考えられるが、実際には、この作品は、ローゼイ・ミラーの翻訳によって1889（明治22）年5月に刊行された。

また、チェンバレンの『英文典』が1888（明治21）年3月に出版されると予告されているが、これも刊行されたのは1893（明治26）年9月になってからのことであり、発行所は弘文社ではなく、共益商社書店であった。

「弘文社出版書目」はまだまだ続き、全ては紹介できないが、上記の後には、教育関連の書名が続く。『女兒読本』（全六巻）や『師範学校編纂 小学読本』（全三巻）といったものもある。また、かつて弘文社から刊行された『西洋畫手本』や『近代二大發明 電話機蘇言機』なども含まれている。

最後に、「特約発売品」として、『東京新圖 (NEW MAP OF TOKYO WITH 1300 Cho References)』やアメリカで出版された簿記のテキストやロンドンで出版された絵本、ミュンヘンで出版された知育絵本などを紹介し、特約販売を行っていることをアピールしている。ちなみに、『東京新圖』とは、英語で町名などを記した東京の地図で「布製折本」、つまり折り畳み式で持ち運びに便利な地図だが、これは松之助の「YAMATOYA」（大和屋）が1882（明治15）年に出したものである。

また、アメリカの *The Boston Medical & Surgical Journal* のほか、『東京メイル新聞』や『ジャツパン、メイル』その他の取次、「上等西洋文房具」や「和製 クリスマ

ス、カード」の販売、ドイツ製「新形 コピープレス」の販売の広告も掲載されており、1887（明治20）年末の時点で武次郎は既にビジネスを多角的に展開させていたことが分かる。

おわりに

「縮緬紙」版の登場によって、『欧文日本昔噺』シリーズの人気は急激に高まり、「縮緬紙」版は、弘文社の看板商品となった。経営が上向くと、武次郎は『欧文日本昔噺』シリーズを20作品（途中で入れ替えが行われたため計21冊）まで拡充させただけでなく、『竹取物語』をはじめとして、ページ数を一気に増やした、より文学的な内容の作品の刊行を手がけていく。「縮緬紙」版の成功は、弘文社のビジネスを教育業界中心の国内販売から海外輸出に比重を移した形態へシフトさせたといえよう。

武次郎は、常に世界の動向を見極め、新しい企画を次々と打ち出して事業を拡大した。その成果のひとつが、1900（明治33）年の第5回パリ万国博覧会での金賞受賞といえるだろう。武次郎が最後までこだわった、和紙を用いた手仕事による木版印刷技術と製本技術が世界に認められたのである。

本稿では、武次郎のちりめん本出版の創成期に注目し、武次郎を取り巻く当時の状況をその背景として考察した。武次郎の『欧文日本昔噺』シリーズは、日本の近代的児童文学の歴史の黎明期に出現した、記念すべき書籍群であり、その影響力は後々まで及んだと考えられる。いずれ稿を改めて、武次郎のちりめん本出版事業のその後の展開を論じたい。

注

- (1) 拙稿「孝女白菊の歌」(1)－(5)『論叢 児童文化』第42号～第46号。カール・フローレンツが井上哲次郎の漢詩『孝女白菊詩』を独訳し、鈴木華邨らの挿絵を添えた、*Weissaster, Ein Romantisches Epos, nebst Anderen Gedichten*が1895（明治28）年に弘文社から刊行されているほか、アーサー・ロイドによるこの英訳版が1897（明治30）年に出ている。なお、本稿では、長谷川武次郎が手がけた、さまざまな紙質および形態の刊行物を総称する際には「ちりめん本」と記し、そうでない場合は、「平紙」版、「縮緬紙」版などと記すことにする。
- (2) 白百合女子大学図書館は西宮版画店より1993年に2枚の版木の寄贈を受けた。

もう1枚は、片面にのみ『竹篋太郎』の挿絵が彫られている。本稿では、後述する「弘文社出版書目」に基づき、シリーズ名として『欧文日本昔噺』を、また、各作品の日本語名称を使用する。実際には、各言語によるシリーズ名やタイトル（場合によっては日本語名称のローマ字表記）が用いられた。

- (3) 長谷川武次郎が没したのは、鈴木あゆみ「長谷川武次郎と縮緬本について」により、昭和12年7月19日とされてきたが、榎本千賀が墓碑を確認した結果、昭和11年の同日であることが判明した。そのため、ここでは没年を1936年としている。
- (4) それぞれ武次郎の子孫からの聞き取りに基づいているのだが、福田清人は「家業は質屋であった」、鈴木あゆみは「西宮家だけ日本橋の本舟町に移転しその場所で魚屋を営んだが、やがて酒屋を経営するようになっていた」、Frederic Sharfは‘food, wine and tobacco’を輸入していたと述べている。また、鈴木とSharfは武次郎の長兄・松之助が家業の酒屋を継ぎ、その後、明治屋と事業提携を行った旨の記述をしているが、『明治屋百年史』（1987）によると、磯野計が横浜で食料品・酒類の直輸入ならびに船舶納入業を行う明治屋を創業したのは1885（明治18）年であり、京橋区木挽町に出張所を開設したのは1891（明治24）年、これが銀座2丁目に移転するのは翌1892（明治25）年、「小売ストア」が銀座に開設されるのは1900（明治33）年である。西宮家と明治屋との関連については、さらに調査する必要があると考えられる。
- (5) タムソンについての記述は、中島耕二「宣教師デビット・タムソンの生涯——誕生から日本基督一致教会の創立までを中心として」に拠った。
- (6) 福田清人は、「一橋の高商の前身に入学、ホイトニー校長時代だったが中退」と述べている。
- (7) 『福沢諭吉事典』には「富田鉄之助」の項があるが、これによると、富田は幕末に幕府公認の留学生として渡米し、1870年にアメリカでホイトニーが経営していたBryant Stratton & Whitney Business Collegeに入学している。同カレッジは、E.G.Folsomが1851年にオハイオ州に創立したThe Mercantile Collegeから、いわばフランチャイズ方式で全米展開したものひとつと考えられる。『簿記学例題』は創立者Folsomの著書、*The Logic of Accounts*（1873）の例題部分を抄訳したものと考えられる。
- (8) 正式には、*The First Reader of the School and Family Series by Marcius Willson* であるが、ここでは日本語による通称を使用する。
- (9) ヘボンについての記述は、高谷道男『ドクトル・ヘボン』に拠った。
- (10) 原胤昭についての記述は、片岡優子『原胤明の研究——生涯と事業』に拠った。

- (11) 大塚奈奈絵は、「明治半ばの欧文挿絵本出版状況——長谷川武次郎のちりめん本を中心に」において、「クワンテン商会」はさまざまな美術書を出版していたパリの Maison Quantin のことだろうと述べている。
- (12) 「縮緬紙」版の登場を明治20年ごろとすると、現存する「縮緬紙」版の奥付に明治18年あるいは明治19年出版と印刷されたものがあるのではないかという反論が起こると予測されるが、弘文社の出版物の奥付情報には注意を要すると考えられる。弘文社の住所は京橋区南佐柄木町二番地を皮切りに何度も変わるが、発行年月日の記述と住所の記述が明らかに矛盾するケースが少なくないからである。ちりめん本の刊行年については、慎重な調査が必要である。石澤小枝子も「初版本かどうかを知るのはたやすくはない」と指摘している（石澤、2004年、18ページ）。
- (13) 鈴木あゆみは、屋寿の生年月日と長谷川家への入籍の年を記している（鈴木、1994年、146ページ）。また、Sharf は、武次郎と屋寿の間に生まれた6人の子どもの生年月日をすべて紹介している（Sharf, 1994, p.12）。

参考文献

〈邦文〉

- 飯泉新吾『丸善百年史 上巻』丸善株式会社、1980年
- 石澤小枝子『ちりめん本のすべて——明治の欧文挿絵本』三弥井書店、2004年
- 榎本千賀「解題」中野幸一・榎本千賀編『ちりめん本影印集成 日本昔噺輯篇』第4冊、勉誠出版、2014年
- 大塚奈奈絵「木版挿絵本のインパクト——1900年パリ万博に出品された「寺子屋」——」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No.14、2013年
- 大塚奈奈絵「明治半ばの欧文挿絵本出版状況——長谷川武次郎のちりめん本を中心に」林洋子／クリストフ・マルケ編『テキストとイメージを編む——出版文化の日仏交流史』勉誠出版、2015年
- 岡本祐美「小林永濯」国際浮世絵学会編『浮世絵大事典』東京堂出版、2008年
- 尾崎るみ「孝女白菊の歌」(1)－(5)、『論叢 児童文化』第42号～第46号、くさむら社、2011年－2012年
- 片岡優子『原胤明の研究——生涯と事業』関西学院大学出版会、2011年
- 川戸道昭「明治時代の英語副読本（I）」『英学史研究』第27号、1994年
- 小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師——来日の背景とその影響』東京大学出版会、1992年

- 鈴木あゆみ「長谷川武次郎と縮緬本について」『白百合女子大学児童文化研究センター報』第13号、1994年
- 創業100年史編纂委員会編『明治屋百年史』、株式会社明治屋、1987年
- 高梨健吉「舶来本の時代」『英語教科書の歴史と解題（英語教科書名著選集・別巻）』大空社、1994年
- 高谷道男『ドクトル・ヘボン』牧野書店、1954年
- 田嶋一夫「ちりめん本「日本昔噺」シリーズ『舌切雀』『瘤取』考——典拠と翻案、『宇治拾遺物語』との関連——」『いわき明星大学大学院人文学研究科紀要』第7号、2009年
- 中島耕二「宣教師デビット・タムソンの生涯——誕生から日本基督一致教会の創立までを中心として」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第35号、2002年
- 長谷川武次郎「木版画の輸出」『美術新報』13巻3号、1914年
- 福沢諭吉事典編集委員会編『福沢諭吉事典』慶応義塾、2010年
- 福田清人「ちりめん本について」村松定孝・上笙一郎編『日本児童文学研究』（叢書近代文芸研究）三弥井書店、1974年
- 裕村裕子「猿蟹合戦」『ちりめん本にみる東西文化の融合—明治の木版多色刷り絵本の世界』展示パンフレット、2019年（白百合女子大学図書館・白百合女子大学児童文化研究センターちりめん本研究プロジェクト共催）
- 山本秀煌『日本基督新栄教会六十年史』藤原鈎次郎、1933年
〈英文〉
- Sharf, Frederic A. *Takejiro Hasegawa : Meiji Japan's Preeminent Publisher of Wood-Block-Illustrated Crepe-Paper Books*. Peabody Essex Museum Collections. Volume130, No.4, 1994.